

パネル・ディスカッション 2 「レジデンスの現場——作家の視点・運営側の視点」

◇パネリスト

下田展久（C.A.P.〈特定非営利活動法人 芸術と計画会議〉理事長／神戸市）

勝冶真美（京都市京都芸術センターのプログラム・ディレクター）

小松裕一郎（陶芸家／コロンバス州立美術学部准教授／アメリカ）

◇モデレーター

松波義実（陶芸の森創作研修課 レジデンス事業担当主査）

松波●こんにちは、陶芸の森の松波です。ふだんは創作研修課で、滞在される作家のサポートをしています。大勢の人の前で話をするのは得意ではないのですが、よろしくお願いします。

それでは、「レジデンスの現場——作家の視点・運営側の視点」ということで、ディスカッションを始めます。下田さんと勝冶さんには、AIR 施設の運営側の視点で、小松さんはいくつかの AIR 経験のある作家の視点でお話をお聞かせ願えたらと思います。

アーティストを評価するコミュニティを育てる

下田展久（C.A.P.〈特定非営利活動法人 芸術と計画会議〉理事長／神戸市）

C.A.P.は、「芸術と計画会議（The Conference on Art and Art Projects）」の頭文字をとった名前です。設立は 1994 年の 9 月です。会員は 30 名くらいで、このうちアーティストは 19 名。アーティスト中心のグループであることが特徴です。〈資料 1〉は設立メンバーで、全員アーティストです。活動は、名前のとおり会議をすることを主におこなっています。

設立時のメンバーは神戸市の美術館構想に意見を求められて、「これからの美術館」という提案書を書きました。美術館は、「いま・ここ」で立ち現れる美術の現場であってほしいという内容で、市はこの提案書を受けとったのですが、翌年に阪神・淡路大震災があって、美術館のプランは立ち消えになってしまいました。このことをきっかけに C.A.P.は生まれました。

震災直後に、フランスのマルセイユで 150 人ほどのアーティスト、が神戸のアーティストにシンパシーを送ろうと義援の活動を行いました。そこで、その義援金を受け取ることになった C.A.P.はなにに使うかを議論した結果、市民参画のイベント「CAPARTY」を行なうことにしました。C.A.P.と Art、Party をあわせた造語です。その第 1 回を、震災のあった 95 年 10 月に開催しました。〈資料 2・3〉

シンポジウムや展覧、パフォーマンス、小鼓の演奏などもしていただきました。〈資料 4〉すると、C.A.P.のメンバーみんなが、「市民参画のイベントには意味がある。つづけるべきではないか」と言い出したのです。そうすると、そのための資金を考える必要が生まれま

した。そこで会員制の寄付制度を準備して、昨年まで民間からの寄付金で市民参画のイベントを年に 2、3 回開催してきました。

いっぽうで、芸術と計画会議ですから、毎月ミーティングを行っていましたが、ある日、会議のゲストの方から、「神戸市の古い建物をアートに活用する方法がないか考えているが、知恵を貸してくれないか」という相談がありました。それが旧神戸移住センターという歴史的建物でした。〈資料 5〉結局私たち自身のプロジェクトとして 1999 年 11 月 3 日から 190 日間、CAP HOUSE という実験を行いました。〈資料 6〉市民を誘って 190 日間をかけて廃ビルの大掃除から始めたプロジェクトが終了し、神戸市から「プロジェクトをつづけませんか」と誘っていただきました。その結果、2002 年から管理を請け負って、CAP HOUSE プロジェクトを継続することになりました。〈資料 7〉

元実習室は暗室に〈資料 8〉移住者が、滞在した部屋は、アトリエに〈資料 9〉またワークショップ、もちろんパーティや展覧会なども行ないました。〈資料 10～13〉

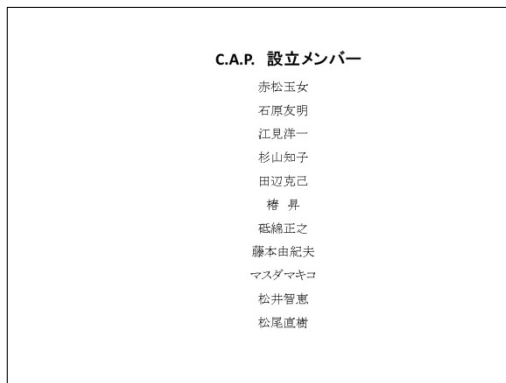
しかし、2007 年で CAP HOUSE プロジェクトは終了しました。2008 年が日本の移民政策 100 周年にあたり、神戸市の条例施設になることに決まったのです。建物は 1 年をかけて改修することになり、その間、神戸市に海のそばの建物を紹介されて、CAP STUDIO Q2 と名前を改め、活動はつづけました。また掃除から始めましたが、ここでも展覧会やワークショップ、コンサートなど、多彩な活動を行ないました。〈資料 14～17〉

条例施設の改修工事は、2009 年 6 月に終了しました。ジョイント・ベンチャーの一員として指定管理者となり、いまでも CAP HOUSE 時代とほぼ同じ活動をつづけています。プロジェクトの特徴は、地域のアーティスト 10 人から 20 人の活動を公開していることです。一般の AIR 施設は、アーティストにレジデンスの施設を提供する事業者がいて、アーティストのために行なっていますが、ここではアーティストがおもしろがって企画運営していることを、市民にも公開していることが特徴です。〈資料 18・19〉

そうして 2014 年には、当初考えていた「いま・ここ」で立ちあがるアートを知らせる場所をつくるのが、CAP HOUSE の事業を数年間つづけたことで、ほぼできた、として、解散も視野に入れてずいぶんと話しあいました。結局、事業はつづけることになり、いまでも新しい取り組みをしています。

現在は、ハンブルグのゲングフィートル、フィンランドのトゥルクにあるビデオ・カフェ、ドバイのタシキール・スタジオとアーティストを交換するプロジェクトを行なっています。プロジェクト名は、See Saw Seeds。〈資料 20〉いまは、神戸のアーティストがドバイに 3 か月滞在中です。2017 年にはフィンランドの人たちがきます。

また、神戸文化祭という活動も行っています。これは毎年 11 月 3 日間、アーティスト以外の人でも、たとえば靴をつくっている人などが、「私はこんなことをしています」と自分の活動を公開する日を作って、ある種コミュニティを強化していくような試みです。最近では、アーティストを取り込んでコミュニティや地域を活性化させることがよく取沙汰されます。しかし、それにはアーティストを評価するコミュニティが育っている必要があります。私たちのプロジェクトも、それにむけたものといえます。



〈資料 1〉



〈資料 2〉



〈資料 3〉



〈資料 4〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」
パネル・ディスカッション 2



〈資料 5〉



〈資料 6〉



〈資料 7〉



〈資料 8〉



〈資料 9〉



〈資料 10〉



〈資料 11〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」
パネル・ディスカッション 2



〈資料 12〉



〈資料 13〉



〈資料 14〉



〈資料 15〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」
パネル・ディスカッション 2



〈資料 16〉



〈資料 17〉

13年7月 アート林間学校 人間ハンコ



〈資料 18〉

15年5月 ペッカ&テイヤ・イソラッティア(フィンランド)



〈資料 19〉



〈資料 20〉